調査報告　一〇〇—二

実践女子大学所蔵
源氏物語古筆切目録稿（二）

横井　孝

例　言

本稿は、本誌各号ごとに（伝称）筆者別に古筆切を収載する。

掲載内容は、国文学研究資料館編『古筆への誘い』（三弥井書店、二〇〇五年三月刊）に準拠し、〔鑑定〕〔書誌〕〔本文〕〔筆者〕〔解説〕の項目をあげた。次に各項目について、同書より引抄する。

〔鑑定〕「極札・正筆書・裏書・箱書など、当該切を鑑定した諸資料の記載を掲げ、可能な限りその図版を挙げた。鑑定印については、（琴山）（守村）など丸括弧内に印文を示したが、解読不能箇所には■印を付した」

〔書誌〕「当該切の縦横の寸法……料紙などについて、基本的な書誌事項を記した」

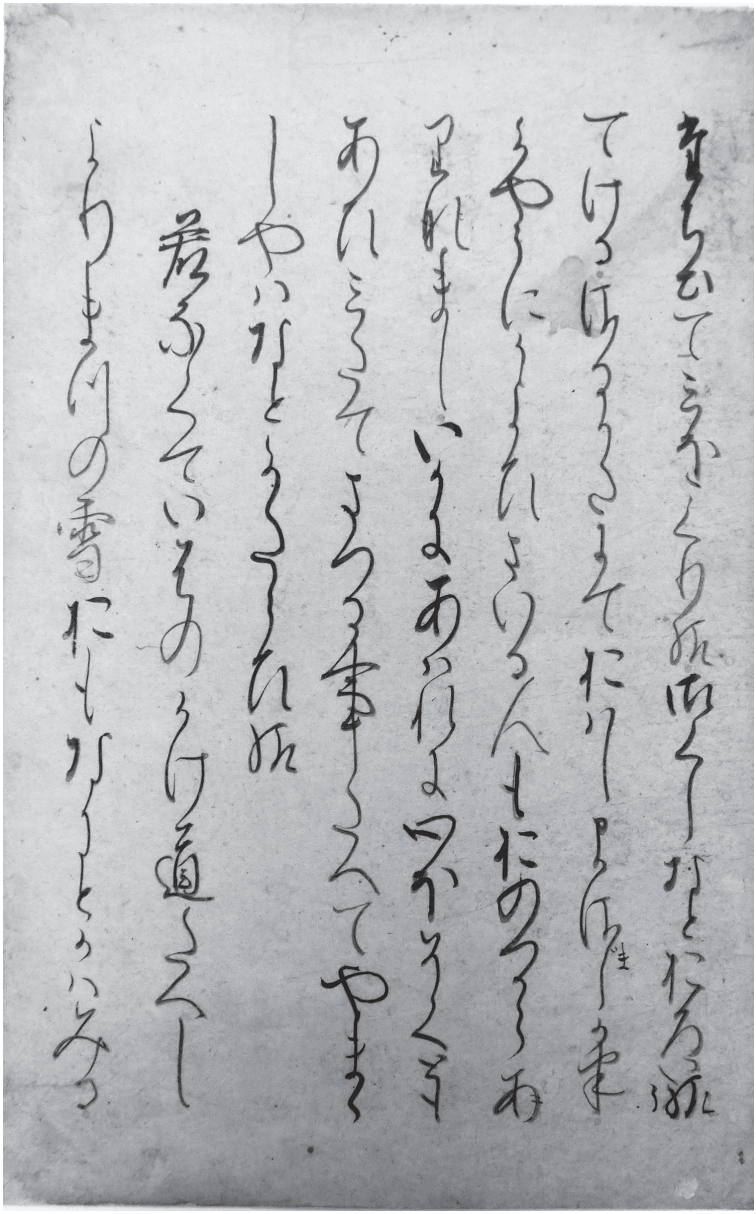
〔本文〕「当該切の翻刻本文を掲げた。……なお、解読不能箇所には■印を付した」

〔筆者（伝称筆者）〕「……極札など鑑定によるものについては《伝称筆者》としてその名を掲げた」

〔解説〕

〔参考〕本目録の新設項目。当該古筆切について直接間接に言及した文献を明記し、詳細な検討はそれに譲ることとする。

なお、〔所蔵〕欄に関して、実践女子大学所蔵の古筆切は図書館（日野・渋谷）・文芸資料研究所・国文学科研究室に分蔵しているが、「下田記念中世古筆群」と全体を仮称しており、学内における区別は対外的に意味のないものとして省略する。



〔鑑定〕極札・オモテ「後京極殿良経公たち出て（「守／村」黒）」
ウラ「　（「了任」黒）」

〔書誌〕縦二四・九cm、横一五・八cm。鳥の子紙。

〔本文〕たち出てみをくり給・御くしなとおろい給う
てける・さるかたにておはしまさ（ま）。しかは
かやうにかよひまいる人もおのつからあ
りなまし・いかにあはれに心ほそくとも
あひみたてまつる事たへてやまゝ
しやはなとかたらひ給
　君なくていはのかけ道たへし
よりまつの雪おもなにとかはみる・　（「・」印は朱点を表す）

〔伝称筆者〕　藤原良経（一一六九～一二〇六）。九条兼実の二男、後京極殿、後京極摂政と称する。

〔解説〕　椎本の巻、八の宮の死後、山の阿闍梨からの見舞いの使者に、返礼を持たせて送り出した際、大君が中の君と感慨をもらす場面である。『源氏物語大成』一五七二頁5行～9行目に相当。

断簡3～4行目「ありなまし」、大島本以下の定家本系・河内本等の諸本には「しけからまし」とあるほか、格別な異同はない。『古筆学大成』には良経を筆者とする古筆を五種あげているが、（一）に分類される末摘花・椎本がツレとされる。そこでは椎本のツレは四葉あげられており、特に後掲の参考資料〔六―2〕は本断簡直前に位置するものであり、そちらでは河内本本文と認定されている。本断簡にも、河内本によく見られる朱の句点がうたれている。

極札は、古筆分家二代目了任（一六二九～一六七四）。初代勘兵衛の子、古筆家初代了佐の孫。

〔六―2〕参考資料（『国文学古筆切入門』所収、伝後京極良経筆椎本の巻断簡）

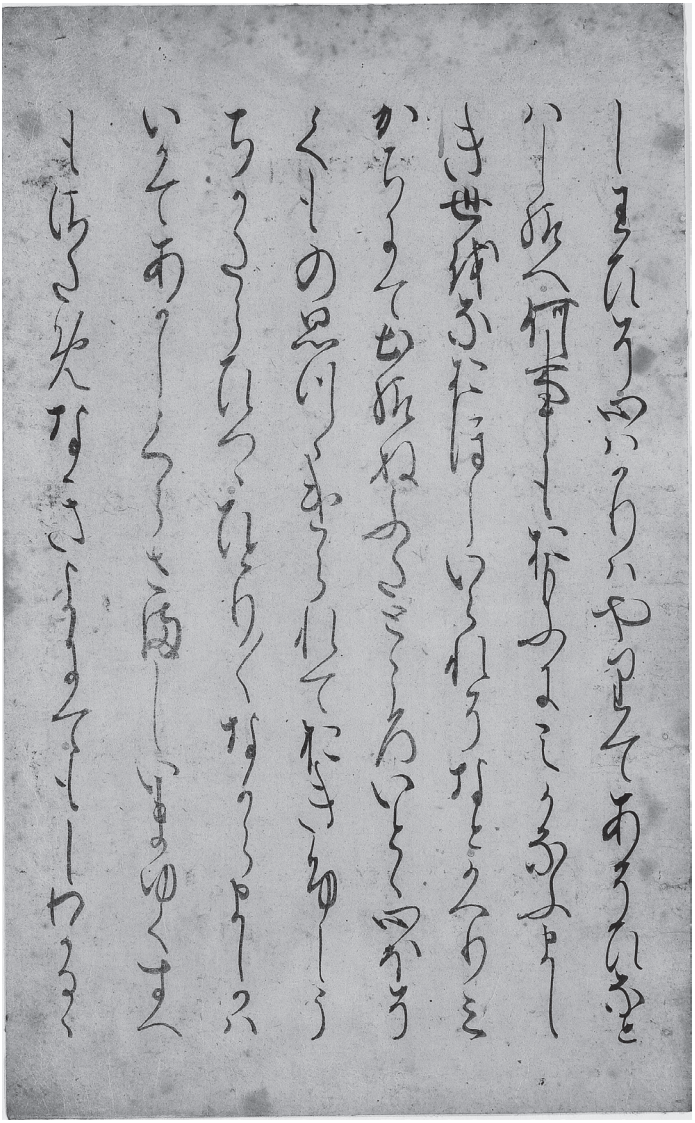
藤井隆・田中登『国文学古筆切入門』（和泉書院、一九八五年二月刊）から解説（藤井隆の執筆）の一部を摘記しておこう。

伝称筆者が後京極良経であり、年代も鎌倉中期はあるもので、河内本である。その意味で却って珍しいといえようか。縦二四・七センチ、横一五・二センチ。椎本の巻である。……後京極良経と伝称する四半切には外に須磨の巻のものがあり、同じ八行詰であるが、一行の字数が掲出切の十五～八字に対して、十三～十六字と少なく、朱点もあるので別の本のようであるが、源氏物語には一筆書よりは寄合書の方が多いし、朱点も全巻にあるとも決まらないから、同本の連かもしれない。本文系統はやはり河内本である。

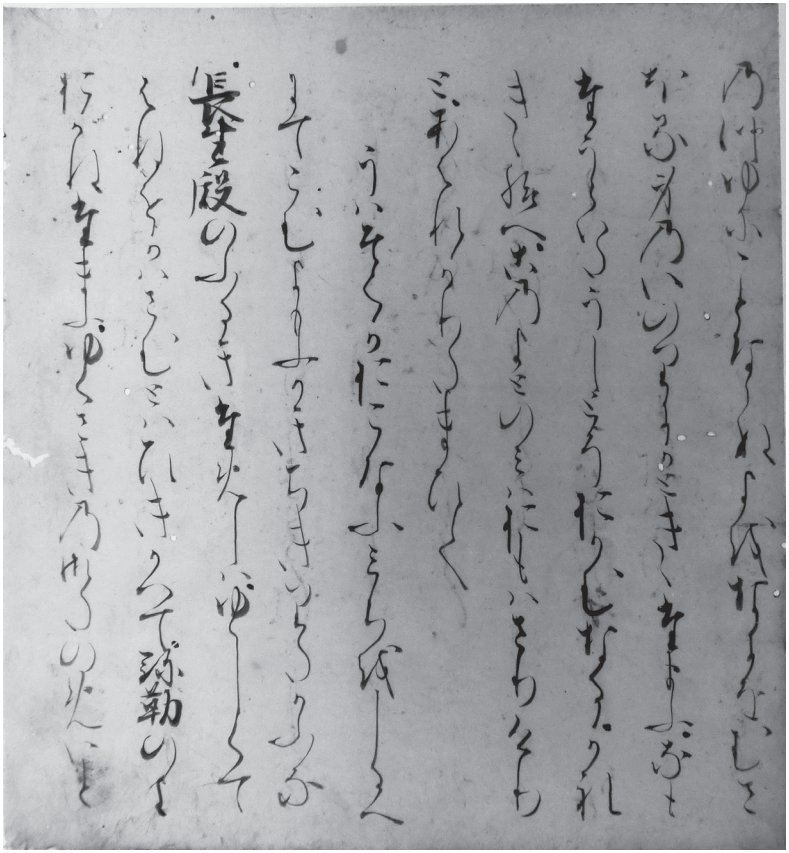
ただし、参考資料の断簡には、1行目「わひそ・心は」、2行目「し給へ・何事」、3行目「なと・かへり」、6行目「つゝ・

ひとり」と朱点がうたれている。

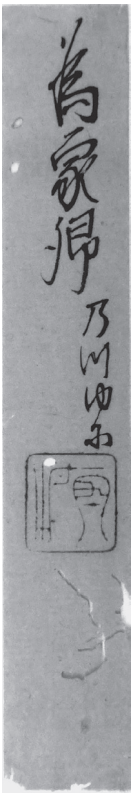
〔六―2〕参考資料図版



〔七〕　藤原為家　六半切（夕顔の巻）



〔鑑定〕　極札「為家卿のつゆに（「守／村」黒）」



〔書誌〕　縦一七・九cm、横一六・六cm。鳥の子紙。

〔本文〕　のつゆにことならぬよをなにをむさ
ほる身のいのりにかとき丶たまふ、なも
たうらいたうしとそおかむなる、かれ
き丶給へ、このよとのみはおもはさりけり
と、あはれかりたまひて
　うはそくかおこなふみちをしるへ
にてこむよもふかきちきりたかふな
長生殿のふるきためしは、ゆ丶しくて
はねをかはさむとはひきかへて弥勒のよ
おかねたまふ、ゆくさきの御たのめいと　（「、」は墨の句点）

〔伝称筆者〕　藤原為家（一一九八～一二七五）。本目録（一＝前号）掲載の〔三〕⑤の極札には「中院亜相為家」の称を記す。

〔解説〕　夕顔の巻、仲秋の明月の夜に一泊した翌朝、近隣の物珍しい様子に源氏が夕顔に語りかける場面である。『源

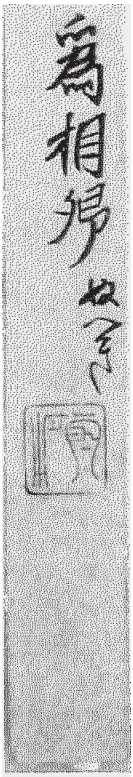
氏物語大成』一一八頁6行～11行目に相当。各行に墨の句点がほどこされている。本文は定家本系統とほぼ同一。薄雲の巻等一連の大四半切〔三〕とは別筆。

『古筆学大成』には為家を筆者とする古筆を四種あげ、そのうち（一）は大四半の花宴・薄雲ほかの一連の断簡。（二）とするものに東京国立博物館蔵古筆手鑑の若紫の巻の六半切（一六・七cm×一四・九cm）をあげるが、当該断簡のような書風とはやや異なり、「重厚な中にも軽妙な筆致」（『大成』の評言）であり、ツレとはいえないようだ。（四）の個人蔵の六半切（一七・二cm×一五・三cm）と比較したいところだが、管見にして若菜上の巻以外の断簡を知らない。

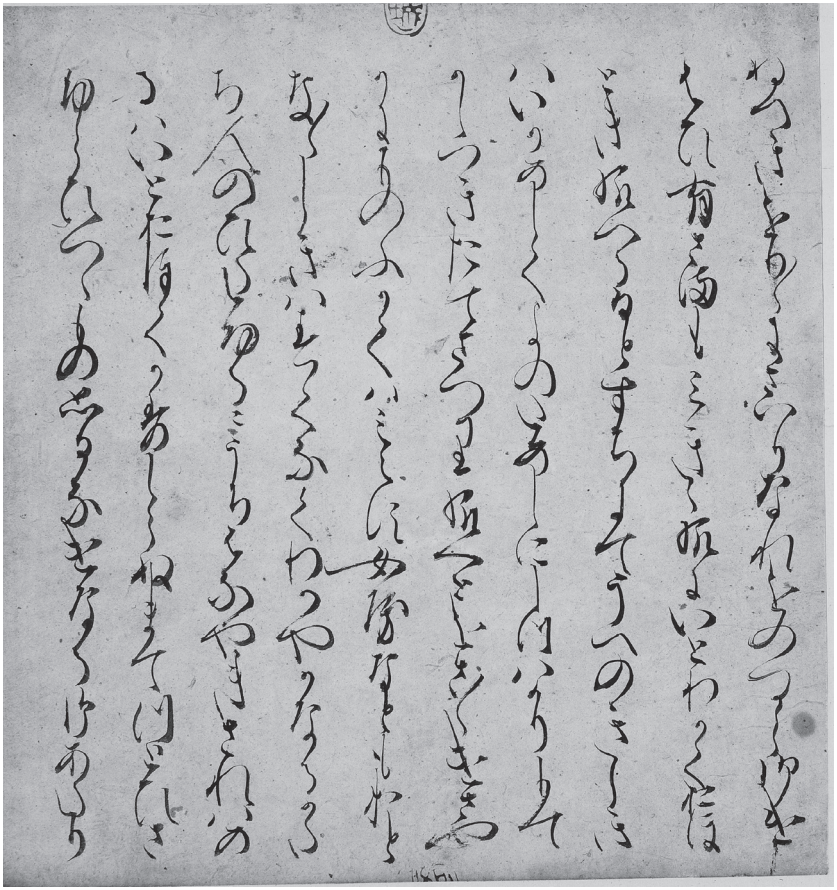
極札は、古筆分家二代了任。ただし裏印なし。

〔八〕 冷泉為相　六半切（若菜上の巻）

〔鑑定〕 極札「為相卿ぬへき（「守／村」黒）」



〔書誌〕 縦一五・六cm、横一四・六cm。鳥の子紙。軸装。



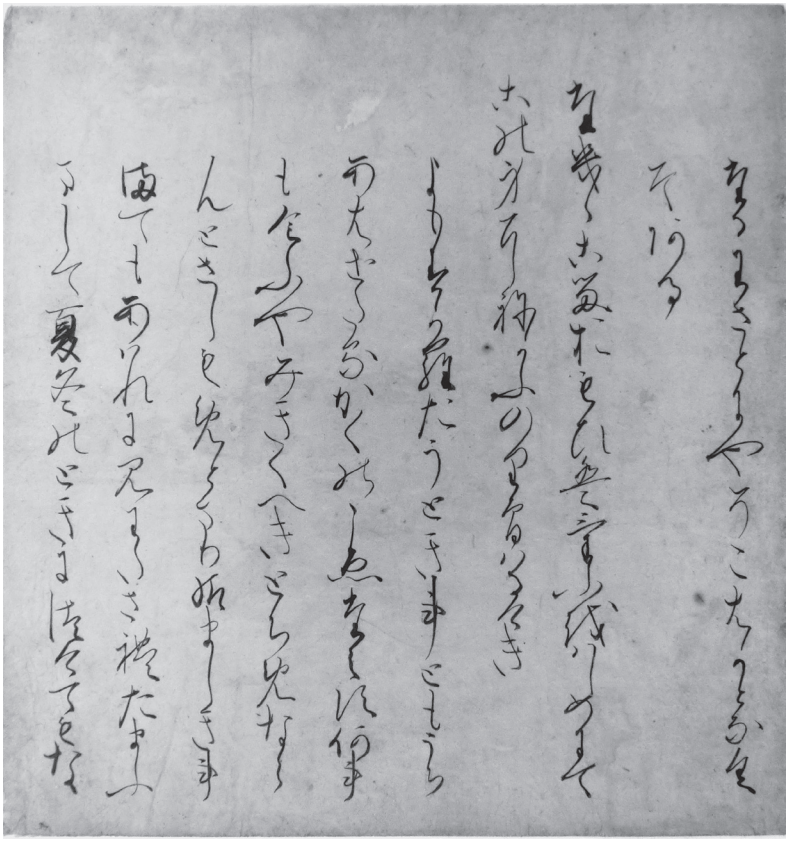
〔本文〕 ぬへきをり〳〵にまいりなれをのつから御け
はひ有さまもみき、給にいとわかくおほ
とき給へるひとすちにてうへのきしき
はいかめしくよのためしにしつはかりもて
かしつきたてまつり給へとをさ〳〵けさや
かにものふかくはみえす女房なともおと
な〳〵しきはすくなくわかやかなるかた
ち人のひたふるにうちはなやきされはめ
るはいとおほくかすしらぬまてつとひさ
ふらひつゝもの思ひなけなる御あたり

〔伝称筆者〕 冷泉為相（一二六三～一三二八）。

〔解説〕 若菜上の巻、夕霧の心中。女三の宮が身近になるにつれて、父源氏や周囲の人の宮への扱いの仰々しさに反して、その正体の幼さを感じ始めている、という場面である。『源氏物語大成』一一〇八頁12行目～一一〇九頁4行目に相当。5行目「給へと」が別本の保坂本と一致する（他の諸本は「給へれと」が多数）ほかは、定家本系統・河内本とほぼ同じ。為相の真筆とするものを確定しがたいといわれるが、『古筆学大成』など既存の為相筆断簡とは本断簡は別筆。また、本学山岸文庫には、初代茂入の極めによって為相筆とされる河内本（早蕨・宿木両巻を合綴）一冊を有するが、これもおそらく異筆。

〔参考〕 横井「源氏物語古筆切二種――ツレをめぐる捜索願」（本誌『年報』第三〇号、二〇一一年三月）。

〔九〕　冷泉為相　六半切（梗概本・御法の巻）



〔鑑定〕 極札オモテ「冷泉殿為相卿たるわさとにや（「拝」黒）」
ウラ「　　（「壬／申」朱）（「茂入／道順」朱）」

〔書誌〕 縦一七・五cm、横一六・五cm。鳥の子紙。

〔本文〕 たるわさとにやそこはかとなく
そある
たきゝこるおもひはけふをはしめにて
この身にねかふのりそはるけき
よもすからたうとき事ともうち
あはせたるかくのこゑたえす何事
もけふやみきくへきとちめなら
んとさしもめとまり給ましき事

まてもあはれにみわたされたまふ
まして夏冬のときにつけてもな

〔伝称筆者〕　冷泉為相。

〔解説〕『源氏物語』御法の巻。『源氏物語大成』一三八四頁2行目～一三八五頁3行目に相当する部分を要約した梗概本の断簡。『大成』底本の大島本では（句読・濁点のみ付した。傍線は当該断簡と一致する箇所）、

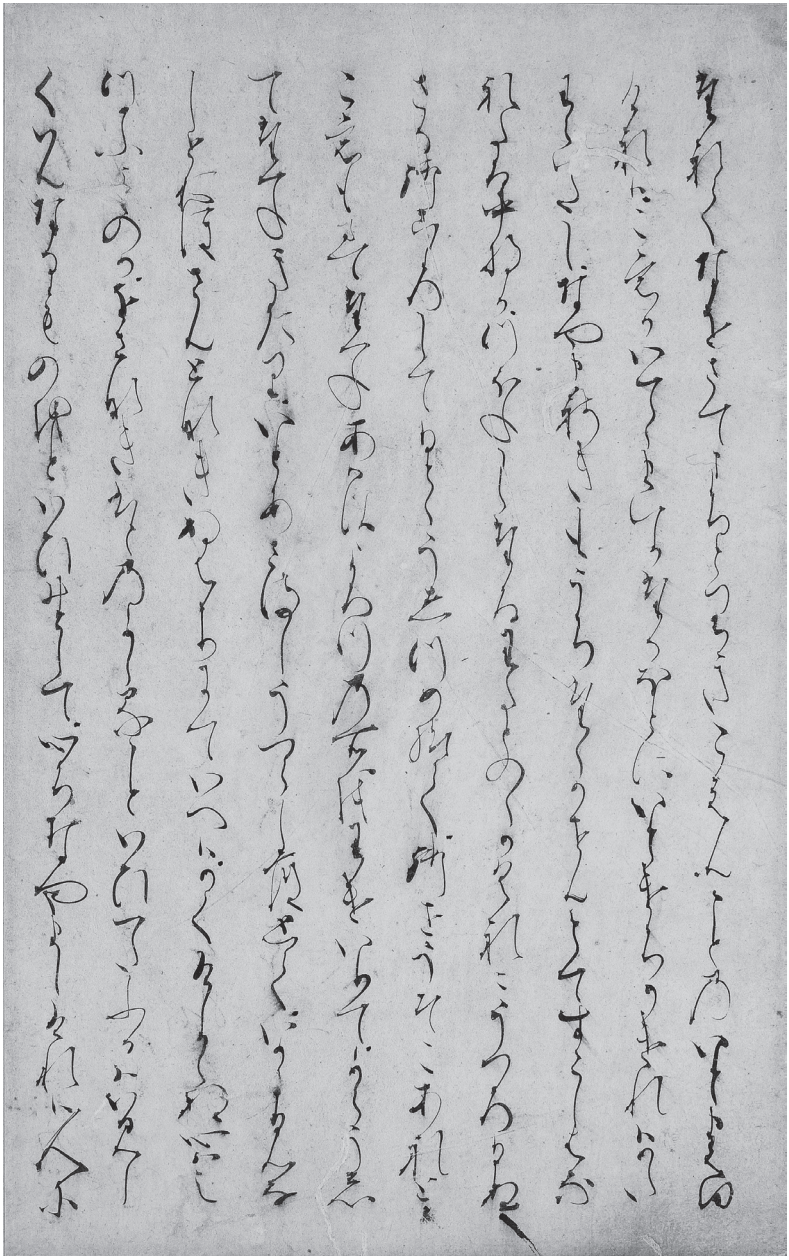
……心をくれたるわざにや、そこはかとなくぞあめる
たきゝこる思ひはけふをはじめにてこの世にねがふのりぞはるけき
夜もすがらたうときことにうちあはせたるつゞみのこゑたえずおもしろし。ほの〳〵とあけゆくあさぼらけ、霞のまよりみえたる花の色〳〵、なを春に心とまりぬべくにほひわたりて、……ことふえのねをも、けふやみきゝ給べきとぢめなるらむとのみおぼさるれば、さしもめとまるまじき人のかほどもあはれにみえわたされ給。まして、夏冬のときにつけたるあそびたはぶれにも……

とある。歌の四句「この世」、河内本・別本「この身」、「とぢめなるらむ」の所は河内本・別本「ならん」、「みえわたらせ給」は河内本と別本の保坂本「みわたらせ給」とあり、これらと一致する断簡の底本は定家本系統ではなく、河内本か別本だったのであろう。

歌集の詞書のように地の文を低書する書法は、「源氏集（源氏歌集）」「源氏物語和歌」など、『古筆学大成』等に類例あるが、本断簡のツレとおぼしきは、今のところ見出していない。諸賢のご教示を請う。

極めは二代朝倉茂入。

〔一〇〕 坊門局　四半切（帚木の巻）（一）



〔鑑定〕ナシ。

〔書誌〕縦二四・六cm、横一五・三cm。軸装。料紙は鳥の子紙。

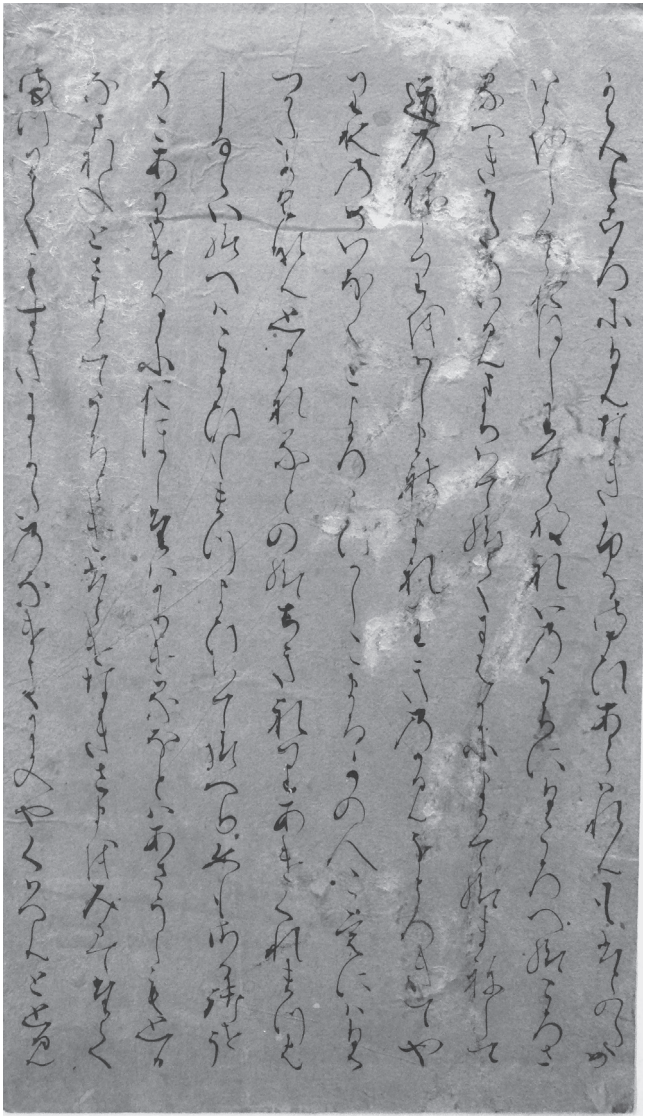
〔本文〕たれてなをさてまちとりきこえんことのいとまはゆ
けれはこ君かいて、まいりたるほとにいとけちかけれはかた
わらいたしなやましきもうちた、かせんとてすこしはな
れたる中将かつほねしたるわたとの、かくれにうつろひぬ
さる御こ、ろしてひと、うしつめ給て御せうそこあれと
こ君もえたつねあはすよろつの所をわけいりてからうし
てたつねきたりいとあさましうつらしと思ていかにひんな
しとおほさんとなきぬはかりにていへはかくけしからぬ心はえ
つかふものかをさなきひとのか、ることいひつたふるはいみし
くいむなるものをといひおとして心ちなやましけれは人に

〔伝称筆者〕坊門の局。藤原俊成女、定家の姉。八条女院暐子内親王の女房。

〔解説〕『源氏物語』帚木の巻、『源氏物語大成』七六頁13行目～七七頁7行目に相当。鎌倉中期写。光源氏が紀伊守邸を再訪したが、空蝉は身を隠して会おうとしない、という場面。3行目「なやましきも」、定家本系統・河内本ともに「なやましけれは」、同3行目「すこしはなれたる」を、定家本系統「ほとはなれてをとてわた殿に」河内本「人はなれてをとてわた殿に」、4行目「中将か」を河内本「中将といひしか」とあり、本文は定家本系、河内本ではなく、別本と認めることができる。

〔参考〕『古筆学大成』第二三巻、物語・物語注釈（講談社、一九九二年六月刊）。田中登「源氏物語関係古筆切三種」（文芸資料研究所『年報』第三〇号、二〇一一年三月）。

〔一〇―2〕 参考資料（『平成新修古筆資料集・第三集』所収、伝坊門局筆帚木の巻断簡）



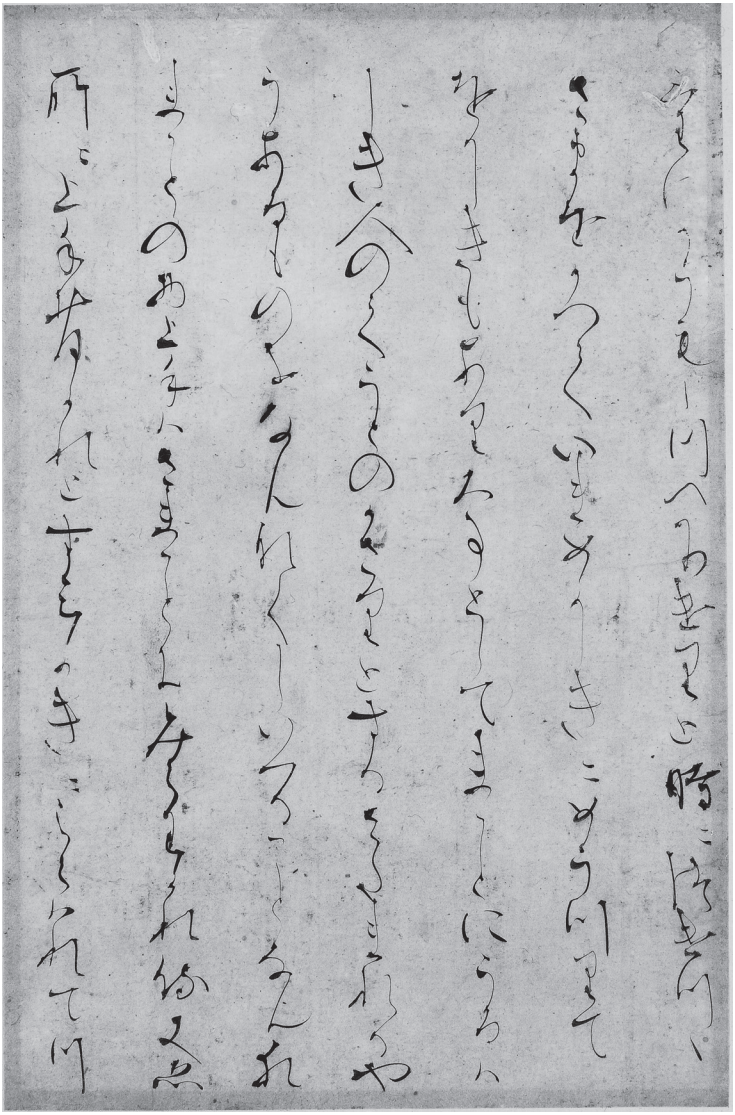
〔参考〕にあげた田中論文に「当該切（注一〔一〇〕のこと）の直前に（注一〔一〇―2〕が）位置し、両者直接に相接するもの」という指摘がある。田中登編『平成新修古筆資料集・第三集』（思文閣出版、二〇〇六年一月刊）から、その一部を次に摘記しておこう。

『古筆学大成』には、坊門局筆とする源氏物語が四種も収められているが、その内、（二）と分類されたものが、掲出断簡のツレに該当し、そこには個人蔵の掛幅の一葉（帚木巻）と徳川黎明会の手鑑藁叢所収の一葉（空蟬巻）とが図版で紹介されている。

掲出切はもと四半形の冊子本で、大きさは縦二四・九センチ、横一四・三センチとなっているが、ツレから判断して、この横幅は少々短くなっているようである。書写年代は鎌倉の中期といったところであろうか。……

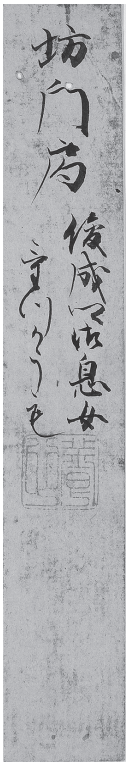
当該断簡は、『古筆学大成』にもと個人蔵として所載。『大成』によれば、徳川黎明会蔵手鑑の断簡には「六代古筆了音の、筆者を坊門局とする極札が添えられている」という。

〔一一〕　坊門局　四半切（帚木の巻）（二）



〔鑑定〕A極札・オモテ「坊門局（けにかうも）（「琴山」黒）」

B極札・オモテ「坊門局（俊成卿御息女 けつかうも）（「養／心」朱）」、ウラ「切　壬寅四（「神田道伴」黒）」



〔書誌〕縦一七・五cm、横一一・六cm。軸装。鳥の子紙。

〔本文〕けにかうもしつへかりけりと時につけつゝ
さまをかへていまめかしきにめうつりて
をかしきもあり大事としてまことにうるは
しき人のてうとのかさりとするさたまれるや

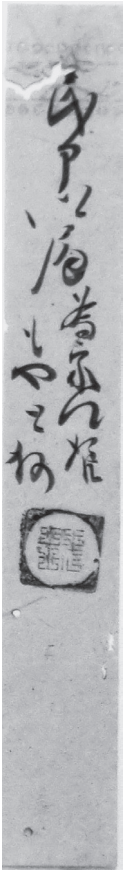
うあるものをなんなくしいつることなん猶
まことの物上手はさまことにみえわかれ侍又ゑ
所に上手おほかれとすみかきにえらはれてつ

〔伝称筆者〕 坊門の局。

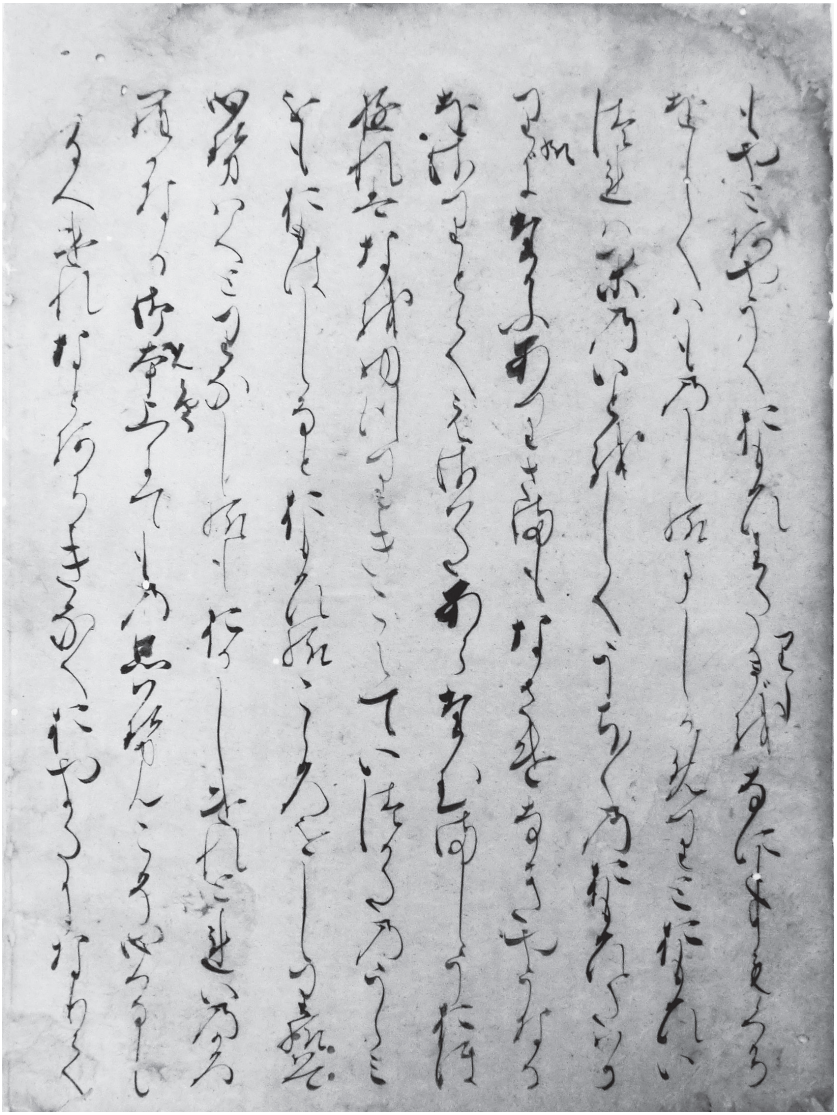
〔解説〕『源氏物語』帚木の巻、雨夜の品定めの一場面。左馬頭が絵画にたとえ、見せかけの美というのは正体が知れている、と説く。『源氏物語大成』四七頁1行目～5行目に相当。御覧のとおり、先の〔一〇〕とは形態をまったく異にする。

〔一二〕 民部卿局　四半切（総角の巻）

〔鑑定〕 極札・オモテ「民部卿局（為家卿娘もやとあ）」「拝」黒）」



〔書誌〕 縦二〇・四cm、横一五・二cm。料紙は鳥の子紙。



〔本文〕 もやとあやうくおもひわたるをなに事もくる
をしくはものし給ましかめりとおもひい
つれはかのいとをしくうち〳〵のおもひたはか
り給にたかふありさまもなさけなきやうなる
をさりとてえさはたあらたむましうおほ
ゆれはなをゆつりきこえていつかたのうらみ
をもおもはしなとおもひ給こゝろをしり給そ
心せはくとりなし給もおかしけれとれいのかろ
らかなる御本上にても思はせんこそ心くるし
■るへけれなとあちきなくおやかたになりて

〔伝称筆者〕 民部卿の局。藤原定家女。

〔解説〕 『源氏物語』総角の巻、『源氏物語大成』一六一四頁4行目～10行目に相当。本目録（一＝前号）掲載の〔五〕にも二代朝倉茂入の極めがついていた。明らかなツレと思われるが、同筆と思われるものの、形態・伝称筆者を異にする断簡が散見される。

「実践女子大学所蔵　源氏物語古筆切目録稿（一）」（本誌前号）正誤

	誤	正
二七〇頁1行目	「■」	「拝」
二七九頁1行目	「■」	「拝」
二八〇頁1行目	民部卿	民部卿局
二八一頁1行目	「■」	「拝」